



六花

2010

平成22年

俳句雑誌りっか

Cover designed by Koko Kuroki

3月号

れん
連

雪 嶺

山田六甲

ゆ 雪 解 や 与^よ 位^い 洞^{どう} 門^{もん} の 人 柱
く 倉 敷 や 鯉 を 籠 目 に 柳 の 芽
か 鵲 の 巢 を 指 し く れ る 水 棹 か な
わ 若 草 や 猫 の 往 来 に 路 で き て
の 仰^の 反^げ つ て を ら ば 見 え 来 し 揚 雲 雀
な 流 れ ゆ く 若 布 に 指 の 届 か ざ る
が 瓦 斯 燈 に 暁 の 霾 ゐ た る
れ 靈 峰 の 雪 解 水 も て 耳 す す ぐ
は 春 障 子 明 り に 針 に 糸 通 す



た 谷町の雨に春場所力士かな
え 縁側は涅槃の雪となりにけり
ず ずり落ちし書より出でたる受験票
し しをらしや舌にくづるる雛あられ
て 鉄屑になり果てし鎌野焼き跡
し しづしづとおずおずと踏む薄氷
か 傘畳む雪嶺包み込むごとく
も 毛氈に膝に潰せし雛あられ
も 諸子焼く火鉢に焦げし竹の箸
と 纜に若布の掛かりぬたりけり

ゆ ゆらゆらと露味噌つつく箸に酔
く 草萌や水平線を望む丘
か 風光る梅の花びら運びつつ
わ 晴れやかにふらここに声沸き立つる
の 飲み明かす春月に身を潤ませて
な 軟膏を膝に塗られて野に遊ぶ
が 瓦礫より草芳しくありにけり
れ 練炭を仕舞ひ北窓開きけり
は 斑雪山仰ぎては畑打ちぬたる
た 淡々と春泥をゆく農夫かな



え襟元を押さへ薄氷覗きをり
ず燧道を仰がば土筆数多なり
し下萌や古草なぶる風の中
ててのひらに春の時雨を確かむる
ししづかなる春風のゆく昼なりき
か窓掛カーテンの揺れ美しく春愁
もものの芽や溢るる光揺れやまず
も木蓮の蕾鎌首もたげをり
と遠柳なびきては色零したる
ののつそりと春泥まみれに戻る猫

鳴き龍の目の血走れる夜寒かな

空音

なぎりゆうのめのちばしれるよさむかな そらね

冬雲の光のあたりあたたかし

冬雲の我が立ち位置に迫りけり

冬雲や上りくるもの落ちるもの

山茶花や月影に香のある如く

龍の目に焦点を絞り「目の血走れる」と表現したことで、目が赤く彩色されているかのように思わせる力がある。手を叩いたとまでは言っていないが、「鳴き龍」という言葉を用いたことよって、寒々とした天井の響きまでを連想させ、季語「夜の寒」の本意をも満たした。同時に、俳句の大切な要素の一つである格調をも具えているのが推薦の理由。鳴き龍は日光東照宮、薬師堂の天上に描かれた絵が有名。龍の頭の下のとろで手を叩くと、共鳴して龍が鳴いているように聞こえてくるところから、鳴き龍と呼ばれるようになった。が、固有の場所を示さなかったことが句を大きくしているのである。

雪 卿 集

冬

笹村政子

冬椿日かげに色の極まれる
岩肌の透けてをりけり氷滝
冬風や立ち上がるかに戻り舟
冬紅葉風に逆らひゐるひと葉
裏返す楳に火の香の初々し

鳩

松本文一郎

鳩潜る無口の義母の車いす
重たげな夕日へ潜り鳩
倒れ伏しなほ賑はへる残り菊
つけし俣網戸を洗ふ小春かな
住古りてなほ知らぬ町秋深し

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

冬の海

志方 章子

冬入日窓の一つに回りけり
秋薔薇あざやかにして匂はざる
華やぎもすこし十月桜かな
ひと粒で口塞がりぬ黒葡萄
冬の海展望台の床に透く

夜寒

武田美雪改め
空

音

冬雲の光のあたりあたたかし
冬雲の我が立ち位置に迫りけり
冬雲や上りくるもの落ちるもの
山茶花や月影に香のある如く
鳴き龍の目の血走れる夜寒かな

蛍雪譚 六甲

冬風や立ち上がるかに戻り舟 笹村 政子

荒れた冬の波ではなく、凧いだ静かな波に立ち上がるようだと言ったのが良い。荒波に舟が立ち上がるのは平凡。この舟はおそらく豊漁だったのであろう。港へ戻るために速度を上げるから舳先がせり上がり、立ち上がる様な形になっているからだ。

倒れ伏しなほ賑はへる残り菊 松本文一郎

残菊は晩秋になって咲き残り淋しい風情の菊。しかし掲句は倒れ伏しながらも、花を盛んに付けている。その賑やかな咲き方が返って寂しさをつのらせるのだよ、と言うのである。「淋しい」と言わず「賑やか」である、と互いに反対の関係にある（対義的な）表現が効果的。

夫留守を狙って現れ冬の暮 貝森 光洋

貝森さんの十八番妻俳句の復活。すこしずつ体調が戻ってきたなあと感じる句。「冬の暮」が擬人化され、夫の帰宅を待ちわびる妻。その心の隙間を狙う悪人仕立てとなっている。妻を心配して見せながら、一方では夕暮れを間男のように匂わせたへくすぐりもあつた。冬の夕暮れにとっては迷惑千万な濡れ衣。

六花集 会員作品

朝日射す桜紅葉の裏表

五ヶ瀬川流一

柿もみぢ農夫は鋤を持ち立てり
故郷や木枯らしさへも懐かしく
誰もいないふるさと木の葉が舞つて
老の身に小さき春のめぐりかな

堤内久美子

ひび割れの大きくなりて鏡餅
髭少しち切れてゐたり飾海老
掛軸を背に据ゑられし鏡餅
父母の亡き故郷や鏡餅
茜空山離りゆく初日の出